

大空 (生徒・保護者向け) 11号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和2年6月26日(金)

自分の絶対値

□本日の概要

- 不得意があると、人は必要以上にできないと感じ臆病になってしまう。自分の得意、不得意をきちんと自覚している人は、あることができないからといって、自分の一般的な能力に関して不安を持つことはない。
- 大学入試などの試験は人間の能力の中で、比較的測定可能な一部の能力を評価したものであり、人間の価値を示すものではない。
- 他者は相対的な位置を知るために大切な指標であるが、それに囚われすぎてはいけない。人間の伸び方は多様であり、自分の絶対値を基準にしよう。
- 才能とは、何かができることではなく、目標への努力を継続できることである。

□成績が気になるあなたへ

西校チャレンジテストが実施され、期末考査が近づいてきました。また、期末考査明けには全国模試も予定されています。このような中、テストや成績、順位などが気になる人も多いと思います。気になるのは当然ですが、必要以上に気にして、自分に自信が持てなくなっている人はいないでしょうか。高校時代の私はそうでした。

自分のことを振り返ってみると、私は運動が不得意なことや消極的な性格など、様々なコンプレックスがありましたが、特に勉強の問題は学校生活の大半を占めるだけに、大きな存在でした。

私は小学校の頃から算数が苦手で、早くも小学校3年生で分数の計算につまずいた記憶があります。それなりに努力して中学校までは何とかりましたが、高校になると数学のレベルは一段と上がります。努力は続けましたが、高校2年生くらいになるとさっぱり授業が分からなくなりました。当時の数学の先生が言った、「微分は、微かに分かる、積分は分かった積もり!」というジョークは自分のことだと今でも覚えています。(笑)

試験にしても、中学時代までは大半が100点満点ですが、高校も実力テストになると、時間も長くなり200点満点になります。その試験で、3桁どころか、50点にいかないような点数をとったりす

ると、自分がとても情けなくなりました。また、全国模試を受験すると、世の中には自分より学力の高い者がいくらでもいるという事実には衝撃を受けました。数学が不得意であるということから、もう自分がダメになってしまったような気持ちになりました。何もかも自信を失い、可能性が見いだせなくなり、将来のためにコツコツ努力することに意義を見いだせなくなってしまうのです。

□不得意は人を必要以上に臆病にする

このことについて、教育心理学者である西林克彦氏はこう指摘しています。

ある一人の人の中に、比較的「できる」分野と比較的「できない」分野があるのは当たり前で、「できない」ことを避けたいと思うのは、人として当然のことだと思います。また、「できない」ことについて、自分は「現段階ではできない」のだとはっきり認識しておくことも大切なことです。

それでも、苦手意識が問題になるのは、実際に「できない」こと以上に、「できない」と感じてしまうことによって、必要以上に臆病になってしまうという、つまらない事態になりがちだからです。

少し視野を広く持てば、人は必ずしも何もかもできる必要があるわけでも、何もかもできないと困るわけでもありません。そもそも何もかもできる人なんていないわけがありません。ただ、ある分野のささいな「できない」ことがコンプレックスになって、その他のところでも必要以上に臆病になってしまうことがまずいのです。

さて、ここからが私の最も言いたいことです。それは、**必要以上にできないと感じ臆病になってしまうのは「できない」ことの原因を、自分の一般的な能力のせいにしてからだと**ということなのです。

ここにたとえば、ある問題が起こっていて、その問題は解決「できない」けれど、解決できない理由はその問題を解決するのに必要な知識のほんの一部だけが足りないからだ、とはっきり分かっている人がいるとしましょう。その人は、その問題が解決「できない」からとって、その問題が関係するすべての

ことについての自分の能力や、もっと一般的な自分の能力のなさ—たとえば頭が悪いといったこと—を嘆いたりしないでしょ。おそらく、その人は、「あの知識が足りないから、いまはこの問題は解決できない」としか考えないでしょう。

自分の得意、不得意をきちんと自覚している人は、あることができないからといって、自分の一般的な能力に関して不安を持つことはまずありません。「できない」こと自体は、必ずしも自分の能力に対する不安感と直結したものではないからです。問題解決に必要な知識についてきちんと知っていて、自分をきちんと分かっている人は、「できない」からといって、その理由をすぐさま自分の一般的な能力が足りないからだと考えたりはしません。そのことをきちんとわかっていないから、できない原因を自分の一般的な能力が足りないせいにして、必要以上に臆病になってしまうのです。

「できない」理由を一般的な能力のなさだと感じれば感じるほど、「できないかもしれない」という恐怖心ですくんでしまう場面も増え、臆病になってしまう分野もどんどん広がっていくと言ってもいいかもしれません。

「あなたの勉強法はどこがいけないのか？」西林克彦（ちくまブリマー新書）

西林氏の指摘は、昔の自分にちょうど当てはまります。数学が苦手であるために、他のことについても「必要以上に臆病」になり、自己肯定感を失っていたのです。

□成績は、不完全な指標である

確かに、成績は大切な指標です。特に、大学進学を志し、合格するには、自分の学力を客観的に知り、得意な分野を伸ばし、不得意分野を補強する必要があります。そのため、宮崎西高校に限らず普通科の学校には様々なテストがありますが、これは、いわば、スポーツ選手がタイムを計測したり、最新の計測機器を駆使しながら自分の弱点を分析ながら、改善のための努力をするようなものです。自分の変化を把握するには、このような測定を継続し、データを蓄積する必要があります。

しかし、大学入試に代表されるテストは、人間の能力の中で、テストによって客観的に測定しやすい学力を測るもので、皆さんの多様な能力の一部の評価でしかありません。大学入試などの試験は、様々な技術的な問題から、本校が重視している「感性」や、人間性などは評価することが大変難しいのです。これらは非認知能力といって、他者と協力して何かを作り上げたり、新しいものを生み出したりす

るには大変重要な能力です。そのため、大学の推薦入試や企業の就職試験などでは、小論文や面接等を取り入れたり、複数の制度を取り入れ、できるだけ多様な評価をしようとしています。どんな制度でも必ず限界があります。

現在の社会で行われている評価は、多様な存在である人間の一部の能力を評価したものです。しかし、そう理解していても、多くの人はその評価に大きな影響を受けてしまいます。だから、皆さんは、評価は自分の意欲を高めるための指標であると前向きに考えて欲しいのです。良いデータができればそれを励みにしてもっと伸ばそうと努力してください。もし、悪いデータができれば、その原因を分析して、努力を継続してください。「不得意があると、人は必要以上に自分はできないと思ひ込み、臆病になる」という思考パターンにはまらないよう、ここは楽観的にいきましょう。不得意があるということは、克服すべき課題が明確だということなのです。

□相対値ではなく絶対値

また、皆さんに心がけて欲しいのは、「他者と比べ過ぎない」ことです。「他者と絶対比べるな」とは言いません。人間は、他者との相対的な位置を敏感に把握する性質を持っており、この本能のような性質に完全にあらがうことは難しいと思うからです。でも、人がそのような性質を持っているからこそ、「比べ過ぎる」ことに陥りがちだということは知っておいて欲しいと思います。平均点や順位、度数分布、偏差値など、皆さんの周りには、他者との相対的な位置づけを測る指標がたくさんあります。その値が仮に低くても、それは単に相対的な指標であって、皆さんの価値が低いわけではありません。自分が努力して、自分のペースで成長しているならそれでいいのです。通信の9号で話しましたように、人間の成長曲線は人それぞれで、努力の結果がすぐに出るものではありません。ところが、入試という現実に日々直面していると、「できるだけ早く、大学に合格できる水準に達する」ことが最大の価値のような気になってくるのです。大切なことは、自分の絶対値を持つことです。自分を基準にして、自分のペースで、自分の目標に向かって、コツコツ歩み続けることです。

才能とは、何かを今できることではなく、目標に向かって諦めずに努力が継続できることだと私は考えています。定期テストだけを目標とする勉強ではなく、定期テストという機会を通じて、大きく伸びることができるような勉強をしてください。皆さんの頑張りを応援しています。